

出羽の俳僧鹿苑舎淋山

二
村
博

出羽の俳僧鹿苑舎淋山

二 村 博

はじめに

鹿苑舎淋山は、文化期（一八〇四～一八一七）に武蔵蒲生、文政・天保期（一八一八～一八四三）に出羽国で活動した俳僧である。淋山については、井上隆明氏によって以下の動向が明らかにされている。¹⁾ 淋山は、出羽本道寺（山形県西村山郡西川町本道寺）の僧で、釈宥勝。本名は長賢。鹿苑舎と号した。慈恩寺（山形県寒河江市）禅林坊晝喜の七男で、のち普明房と改める。慈恩寺から武州修行に出て、文化十二年（一八一五）十一月、武蔵蒲生（埼玉県越谷市）光明院から帰郷し、慈恩寺宝蔵院七十六世となる。文化十四年（一八一七）八月に西川町の末寺本道寺（真言宗寺院 明治以降は湯殿山神社）に移った。宝蔵院時代の文化十四年（一八一五）四月十六日、乙二が立ち寄り、高橋国村（武蔵蒲生の人。巢兆の秋香庵号を継承。）は、一冬杖を留めた。慈恩寺は天台・真言両宗を併せた慈恩宗の本山で、三院十八坊からなる。三院のうち新義真言宗が宝蔵院と花蔵院。天台宗が最上院であった。文政十一年（一八二八）、領内外知友四十三人に依頼した句に、自らの二吟を加えた句額を慈恩寺に奉納している。文政十二年（一八二九）十一月、新庄藩主戸沢氏の招きで、祈願所の真言宗円満寺（山形県新庄市五日町）に閑居した。支度金二十両、絹二百疋（一疋は二反）で、うち十両は寄付、残り十両で二十人前後のお膳を作り、実家に預けたという。天保五年（一八三四）弘法大師一千年記

念に最上に新国八十八所を開創している。編著に『うきおり集』（文化十二年八月刊 挿絵随斎、広井秀石刻）、巢兆追善集『星の林』（文政九年 秋香庵国村校、挿絵菜翁）がある。天保八年（一八三七）十一月二十六日没。

福島県会津美里町の田中文庫には、近世後期俳人から会津高田（現会津美里町）の田中月歩に宛てた自筆書簡が数多く現存する。本稿では、その中から淋山が月歩に宛てた新出書簡十三通と国村書簡一通を翻刻し、関連俳書等を調査することにより、執筆年代を推定した。文化期の江戸三大家（夏目成美・鈴木道彦・建部巢兆）と称された巢兆に師事した淋山が、出羽俳壇において俳僧として活動した実態について考察する。

一、武蔵蒲生在住時代の淋山（文化四年～文化十二年）

淋山が文化十二年（一八一五）十一月に武蔵蒲生（越谷市）から帰郷したことは、井上隆明氏の調査に言及があるが、淋山がどれほどの期間蒲生にいたのかは、これまで明らかにされていなかった。本章では、巢兆の編著、月並における入集状況から、淋山の蒲生滞在時期を探ることとする。管見による最初の俳書入集は、文化六年（一八〇九）の春興句を収録した『玉の春』である。巢兆は文化十一年（一八一四）十一月十七日に五十四歳で没しているが、淋山が巢兆の没年ま

で師事していたことが以下の入集状況から判明する。

巢兆の編著における淋山の入集状況

『玉の春』文化六年（一八〇九）

干葉汁のまうけ安さよ初櫻

淋山

『仙都記行』文化八年（二八一） 秋刊

竹藪へ月八落けり啼からず

淋山

『うさぎむま』文化九年（二八二） 秋刊

名月や此ごろ出来し艸の菴

淋山

『はいかい小がさハラ』文化十年（二八一） 刊

難波津や舟の中にも大牡丹

淋山

『木実あはせ』文化十年（二八一）

袖が子の椎実溜まるふくべ哉

淋山

『珠の市』文化十一年春

春風や田の隅くくの田螺殻

淋山

次に巢兆が発行した月並高点摺をみてみよう。文化四年十一月発行の高点摺に「ガマフ（蒲生） 淋山」の作品がみえ、末尾には、「卯月次十一月評 百余吟之内七点已上」とある。百数句寄せられた句のうち、七点以上の高点句を掲載した摺物である。これにより、淋山は文化四年（一八〇八）には武蔵蒲生（光明院であろう）におり、巢兆の月並に投句していたことが判明する。以下、巢兆の晩年まで意欲的に投句していたことが入集状況から確認される。便宜的に太字で表記した文化八年六月、文化十年一月、文化十年四月発行の高点摺では、上位三人の勝者（選ばれており、文化九年六月発行の高点摺では催主（取りまとめ役）を担っている。蒲生在住時代の淋山は、師巢兆のもとで精力的に句作に励み、一門における中心的な存在となっていたのである。

巢兆発行月並高点摺における淋山の入集状況

『秋香庵月並高点摺』文化四年十一月

煤はきや黍殻垣を結ながら

ガマフ 淋山

『秋香庵月並高点摺』文化七年八月

行秋や矢橋をあがる三井のかね

淋山

菊 行秋 先月追加 混題

『秋香庵月並高点摺』文化八年六月

尼達の掃除もセ話し萩の花

淋山

鶏の尾や風におしたつ萩の花

淋山

勝 五楼 米室 淋山 兼題 萩 うづら

『秋香庵月並高点摺』文化八年七月

照月や汐の引行山のかげ

ガマフ 淋山

『秋香庵月並高点摺』文化九年一月

サ、□サの松見にまことひばり啼は

淋山

ワか艸に甲干す龜のならびけり

淋山

『秋香庵月並高点摺』文化九年六月

明がたや露にふみ込小まつ原

淋山

淀にて

『秋香庵月並高点摺』文化九年十一月

むしなくやさやく寝ずに十三里

催主 淋山

寒梅や隣をとへば坊主衆

淋山

寒梅や紺屋に立し竹もがり

淋山

『秋香庵月並高点摺』文化十年一月

松葉敷し庭の雪解の箒哉

ガマフ 淋山

人気なき比叡の谷間や几巾

淋山

菜畠を鶏のふみきる雪げ哉

淋山

遠敷の松に入日や几巾

淋山

『秋香庵月並高点摺』文化九年十二月題追刻

鶴の舞初空遠しつくば山

淋山

はま弓や此ごろ出来し違棚

勝 竹馬 如柳 淋山

鐘つきがはつむちからや雉子声

「秋香庵月並高点摺」文化十年二月

ひと柏枝に持そふワらびかな

「秋香庵月並高点摺」文化十年三月

猫の住穴もかくれてワかばかな

はなむけの馬も往るや閑古鳥

つなぎ舟昼寝の人にかんこ鳥

「秋香庵月並高点摺」文化十年四月

茶せん売入来る里や紅の花

紅の花湯殿参りの頭挿哉

勝 淋山 完冲 国むら

「秋香庵月並高点摺」文化十年五月

哥よみが艸のまくらに御秋哉

「秋香庵月並高点摺」文化十年六月

あさがほや灸をすへる椽の先

「秋香庵月並高点摺」文化十年七月

鷹啼て天の橋立過にけり

駒引の試に呑湖水かな

「秋香庵月並高点摺」文化十年八月

崩たる塀の外面や蒿もミぢ

隣から聾をまねく新酒哉

兼好の筧も埋む紅葉哉

「秋香庵月並高点摺」文化十年九月

こがらしに田鶴吹戻す磯辺哉

「秋香庵月並高点摺」文化十年十月

ゝ

淋山

淋山

ガマフ 淋山

二ノ 淋山

淋山

淋山

ガマフ 淋山

淋山

淋山

二ノ 淋山

淋山

淋山

淋山

淋山

つりくと鳥の并居る氷かな

「秋香庵月並高点摺」文化十年十一月

筏士の飯に日のさす枯野哉

鶯八口かげなりしびわの花

ガマフ 淋山

淋山

淋山

淋山の武蔵滞在は少なくとも文化四年から十二年までの九年間あった。そして淋山は、巢兆が没した翌年の文化十二年に出羽国慈恩寺宝蔵密寺（山形県寒河江市）に帰郷している。その置き土産として刊行したのが『浮織集』（文化十二年八月刊 淋山編）である。その経緯は蒲生の高橋国村が述べている（以下、『浮織集』の引用箇所は東京大学知十文庫デジタル資料を筆者が翻刻したもの。句読点、濁点、括弧の私注を適宜加えている。）。

古人菜翁（巢兆）浮おり集序辞目録の趣向を得て、終に果さず茲に鹿苑舎の宥勝僧都この心ざし無下にせむ事をかなしミ、今年出羽の国最上なる慈恩寺山寶蔵密寺に移転の次手、これを留別の置土産にせむと撰者にかはる。さればめでたき無為の浄国になき魂も遊なん事をよるこびあひぬ。けふ草稿の筆とり、ワれにゆるされたれば、事のあらまし肩骨を鳴らして拐にはこぶと云。

埼玉まの国村書

『浮織集』は、巢兆生前の編集意図を継承して、淋山が撰者となつて編集したものである。淋山は、師の巢兆が文化十年に執筆していた序文を同書の巻頭に掲載している。巢兆序文は以下の通り。

我が隣くは垣根あらハにて、藤豆唐黍の葉ずゑの露を結べるに賤機おれる綾竹の音のミ常に声して、紡績の車八榻のはしかきならねど、白足行歌と歎詠せる機足のかげろひ四ツ目垣のひまよりをりくくに覗くぞワリなき。すべて爰らの織ものハ等閑のゆふ機

のミにてさしぬきさまでむつかしきにもあらず、いつぞや上野の国桐生といふ処にまかりてぞ始て高機立るやうをも見侍りき。そこにてハ紗綾ちりめん、緞子、縞子、縞ちんまでもおのがさまく織出めり。その織屋にハ見る目もかひ高きばかりに五百機立て、高きところに人のぼりてさまく綾をとる。それを下なる織手の拍子合てさしぬき、さすれば峯のあらしも袖に積れるやうにて花も紅葉もそれがまにく浮あらハれて今の世の人のエミとも覽ざりしが、錦をさらす庭のけしき所かはるならひ、また格別なり。あハれいにしへの先達の言葉に和歌ハ浮おりのやうにてこそあれと侍りしが、これによせて案るに、いかで和歌のミならむや。誹かいてもまたしかなりける。わづかにキリハタリのひゞきの中に浮くとしたる吟も是又出来らん事、たとへばかの高機立る如く前後のつり合胸あはぬかた綾にてハよき織紋の出べきやうも待らず。かみもしも彦星のふたつ双ておはずやうにてこそさへくしきおりかたも出来べけれ。いでやその浮おりのねがはしければと頃日我が唐黍の下にもあからさまの高機立て余所の庭見ぬ撫子の手つきにせばやと思の外さて織出て見れば、綾瀬川あやしき景のかたよりになりて、賤がおだ巻くりかへしく見るほどに、なほ糸屑ハたかりける。されど事の果ざるハ機を断にひとしともいへりければ、唯このまふとおりもてなまじひにかたはらの市人にひさぐ事とハなれり。

文化十年 秋香菴巢兆

『浮織集』の書名は巢兆が上野国桐生に赴き、高機たかた(空引機そらひき)。一人が織機の上に座つて経糸たていとを引き上げ、もう一人が緯糸よこいとを通して織り上げる。を見たことが契機たがひになつていた。巢兆の桐生訪問年代は今のところ特定できないが、様々な織紋を紡ぎ出す浮織のように多彩な句集を編集しようとしていたのである。趣向として「織紋目録」を掲げ、「花」、「鳥」、「月」などの項目に分けて三句ずつを配している。

『浮織集』の入集者は当代著名人を含む広範囲に及び、名古屋の塊翁・不転、岡崎の卓池、京都の其成・蒼虬、浪花の長斎、近江の千影、伊勢の椿堂、足利の麦茂、桐生の月鴻、上毛の鹿太・鷺白、蒲生の語竹、諏訪の素檠・若人、常陸の李尺・渾堂、上田の雲帯・如毛、秋田の野松・巴陵、南部の素郷・平角、仙台の曰人、本宮の冥々、会津の如髪、出羽の怡雲、江戸の寥松・成美・一峨・護物、下総の雨塘・太策・李峰・素月尼などの作品を収録している。淋山は「雲鳥」の項目に以下の句がある。

鴈がねや筑波へさハる雲の脚 淋山

末尾を締めくくるのは「鶴亀」の項目で、巢兆高弟の国村と巢兆の句が並記されている。

梅にはや間鶴の遠音かな 国村

梅が香やおもへば寝たる亀のうへ 古 巢兆

次に、「さる綾機の数多く品切のあればそれに四季の染入縫箔そめいわたぬいばく(模加工)のもやうをそへてせつかく俳かい賣とぞいはれる。」と述べて「織紋目録」以外の句を収録している。こちらには江戸の道彦・完来・午心、上毛の紅碩、京都の雪雄、陸奥の雨考、与人らの作品がみえ、一茶の「姨捨のくらき中より清水かな シナノ 一茶」も入集する。この句は『十家類題集』(寛政十一年 八千坊屋鳥編)に掲載されている旧作で、『浮織集』のために一茶が寄せた句ではなさそうである。巻末の一句は、「光明精舎を立出る宵 留別」と前書して、淋山の「椎の木や秋風ふくも知らぬ顔」で締めくくり、随斎(成美)による糸車と糸を紡ぐ女性の画を配している。

師巢兆の知名度、高弟国村の支援もあり、淋山が武蔵への置土産として編集した『浮織集』は、当代著名人を網羅した一冊として刊行されたのである。

一、出羽帰郷後の淋山（文化十二年～天保八年）

出羽帰郷後の淋山は文化十二年（一八一五）十一月から慈恩寺（山形県寒江江市）宝蔵院七十六世となり、文化十四年（一八一七）八月には本道寺（山形県西村山郡西川町本道寺）現本道寺口之宮湯殿山神社に移った。文政十二年（一八二九）十一月には円満寺（山形県新庄市五日町）に閑居し、天保八年（一八三七）十一月二十六日に没している。本稿で紹介する十四通の新出書簡（便宜的に通し番号を付した）は、本道寺時代の十三年間に差し出されたものが中心で、会津美里町の田中文庫が所蔵する。

淋山書簡の受取人、田中月歩について述べておこう。月歩は会津高田の人。通称昌之進。字は東昌。弱冠にして郷学の師となった。多才な人で兵学・篆刻・書画・医方・茶道・瓶花・鉄筆を嗜んだ。俳諧は京都の関更門といわれるが、行脚俳僧の瓜坊を介してのものである。老後は遼来山人、また再児と号した。天保九年（一八三八）五月二十日没、七十六歳。高田の竜興寺に葬る。墓碑銘は安積良斎。追善集に『袖塚集』（天保十年 土由編）があり、同書の土由跋には、「翁名は慎、字は久和、はじめ叢竹庵草蘿と号し、後月歩と改む。」とある。「草蘿」から「月歩」に改号したのは文化八年～十三年頃で、『信夫山』（関本巨石追善集 文化七年 如髮編）に「ばらくと霞もて来て月夜哉 高田 草蘿」と草蘿号で入集している。『河上集』（文化十四年序 如髮編）には、「去年の夏再三（会津柳津の人）亭に遊ぶ」と前書した「月といひ川といひ此納涼哉 如髮」の句と並記して「稲妻の落合にけり只見川 月歩」の句があるので、文化十三年夏には月歩と名乗っている。本稿で紹介する十四通の新出書簡はすべて「月歩」宛であるから、文化十四年以降の出羽から差し出されたものといふことになる。

『河上集』（文化十四年 如髮編）には淋山の「芦の家にはつみのつ

きし若葉哉 本道寺 淋山」も入集する。編者の如髮は以下に紹介する新出書簡にもたびたびその名がみえるが、月歩とともに化政期会津俳壇の双璧をなした人物である。如髮は陸奥国喜多方小田付村の人。本名関本直房。通称與次兵衛。別号に市中軒、睡翁、六種園。関本家は越前屋を屋号とする商家であった。健脚で旅を好み、文化八年（一八一）冬から翌年まで江戸から東海道を経て京都に訪れている。帰路には仙台まで北上した。文化十四年一月には再び関西に旅立ち、尾張、伊勢、京、大坂、伊賀を巡って、帰りに信濃に立ち寄っている。淋山が『如髮集成染筆帖』（群馬県立女子大学蔵）に染筆するのは文化十四年以降のことだ。

焼ミそに茶漬のあぢや閑子鳥 鹿苑舎 淋山
の揮毫が確認される。如髮は文政十二年（一八二九）九月十五日没、八十一歳。

以下、新出書簡を推定年代順に紹介する。尚、翻刻にあたっては便宜的に人名をゴシック体で記し、濁点等は適宜補った。

1 淋山書簡田中月歩宛 文政一、二年一月十七日（推定）

印 羽州湯殿山

如髮君方御達可被下候。以上。

会津高田駅

田中昌之進様 本道寺

雅用 （包紙）

梅柳之召賀芽出たく奉存候。益御安康御越年奉萬福候。愚子無為加歳いたし候条、御安慮可被下候。然ば旧冬清林帰山之節は御懇書殊二摺もの曆など御恵ミ下され御懇切忝奉存候。扱又去夏中は御信切二御尋被下候所睦々御雅談不承残念于今難忘奉存候。此節^①國村子事下向いたし同居罷在六、七年滞留之積二候間、何卒当夏など御見合^②如髮君御同道被下御来駕之程奉待候。尤七月相除き前後に永く御滞留之思召二て御光臨可被下候。心事其節申述

候。余は期永日之時候。頓首。

正月十七日 淋山

月歩様

それ鷹に餌壺叩くや春の風

三里来し馬に逢けり朝霞

てりあがる空や舞雀啼雲雀

うき旅の思ひいでけり若な時

右高評奉待候。去冬御聞下され候玉詠、何れもおかしく感吟仕

候。以上。

① 国村—武州蒲生の人。巢兆の高弟。

② 如髪—喜多方小田付村の人。関本與次兵衛。別号に市中軒、睡翁、六種園。文政十二年（一八二九）九月十五日没、八十一歳。

本書簡によれば、武蔵の国村は出羽の淋山のもとに来て六、七年滞在する予定だったことがわかる。この記述を手がかりに本書簡執筆年代を推定するためには、巢兆十三回忌追善集『星の林』（文政九年淋山編）の淋山による自序を読み解く必要がある（以下、『星の林』の引用箇所は早稲田大学蔵本のデジタル資料を筆者が翻刻したもの。傍線・カギ括弧・括弧の注・濁点は筆者が便宜的に付した）。

斯る題号したるは亡師巢兆自筆の日稿にて海士のより蓑樵夫の斧曲まで洩さずしるせるを、さきに国むら本道寺に遊ぶの頃、且にゆふべに手もと放さず翫ぶものから、帰国に至りて方丈に残し置ぬ。予もまた知己の手ぶりの懐しさに間がな透がなこれを開て居士が在世のいさおし（勤勉）を思ふに「遠くから見ては置れぬ」（遠くから見てはおかれぬ桜かな 巢兆）と賞美のさくらもあえなき風に誘はれ、世をいそぐありさま眼前に、「菴を出て雪より白しけしの花」（巢兆の句）のもろくはかなきためしもとかく申出られ侍る。本有常住の月を胸中に澄し往因の酬ひもなとか悟

らざらめ。かく世を厭ふのこゝろ隈なくせつなりしより業に秀ることのほがらかなり。さすが名譽のたまものなりければ、月ごと日ごと管見の懈なきもはや十二支のめぐりあハせを幸ひ故人のこゝろをおしはかりこの星の林をもて遠芳忌を営んにこそとなき友を指おりなを諸彦の珠玉を拾ひ合せ湯殿下山の道者に言伝してむさしの秋香菴に再び艸稿を送る。

文政丙戌年

出羽國湯岳 沙門 淋山識 印（陽刻方印「鹿苑」）

右の淋山自序によれば、蒲生在任時代に親交した国村が出羽の本道寺に訪れ、持参してきた巢兆自筆日記を淋山に貸したまま帰国している。淋山は巢兆の没後十二年が経過した文政九年に巢兆自筆日稿（書名は『星の林』だったのだろう）を武蔵の秋香庵国村に返送し、十三回忌追善集『星の林』を刊行することにした。

国村は、高橋源蔵。巢兆の高弟で、巢兆の秋香庵号を継承している。『徳万歳』（寛政十二年 巢兆編）と『関屋帖』（享和元年版 巢兆編）に発句一句入集。『関屋帖』（享和二年版）では、巢兆発句歌仙の脇句を詠んでいる。文化七年（一八一〇）夏、巢兆門の柳翠、国村の信濃旅行を記念して巢兆が一枚摺を発行した（『書簡による近世後期俳諧の研究』矢羽勝幸編著 日本書誌学大系74 一九九七年 青衣裳堂書店 一六五頁）。

国村は、巢兆句集『曾波可理』（文化十四年 巢兆・国村編）の編者として知られる。同書は巢兆が生前自撰した春夏の句に、国村が秋冬の句を補って刊行したものである。巢兆が没したのは文化十一年十一月十七日であるが、当初国村は巢兆三回忌にあたる文化十三年に『曾波可理』を刊行しようと考えていた。だが、『曾波可理』を校閲した信州諏訪の藤森素槩は、秋冬の部を編集した国村に書簡を認め、「巢兆居士年来の玉句ども数吟御写し被下候様ねがひ上候。句集御出し被成候事、明年頃が可然候。急ぐとあやまりあるものなり。かねて

の御懇意小子二八いづれ御内見希候。」(『曾波可理』所収)と拙速な刊行を諫め、誤植を減らすために一年延期することを提案している。国村は素槩のこの助言を尊重し、この素槩書簡をそのまま『曾波可理』の夏の部と秋の部の間に模刻掲載した³⁾。こうして巢兆句集『曾波可理』は、巢兆三回忌の翌年にあたる文化十四年に刊行された。

『星の林』の淋山序文にみえる「巢兆自筆日稿」は、国村の『曾波可理』編集に大いに役立ったことであろう。国村が出羽に来訪したのは『曾波可理』の刊行翌年の文政元年頃である。『岩手俳諧史』上巻(小林文夫 昭和五十三年 萬葉堂 一七九頁)によれば、「文化十五年四月八日(四月二十二日に文政元年に改元)には巢兆門の高橋国村が盛岡に着いて平角亭の客になり、二十八日には梅園に移って盛岡に滞在し、五月六日には『ぬれ簀もおかしく成て飛ぼたる 国村』の句を留別として鹿角(秋田県鹿角郡)へと旅立って居る」(括弧は私注)とあり、国村が文政元年に陸奥にいたことがわかる。

『星の林』(文政九年 淋山編)には、巢兆遺稿として、巢兆の独吟半歌仙を掲載している。

明月に分て夜寒の閑屋かな
鴈の通るも旅のよそほひ
(以下略) 古 巢兆

この半歌仙の次員を淋山、燕市、有圭、国村、柳水(いずれも巢兆門人)が付けて追善歌仙としている。さらに、一茶、素槩といった当代著名俳人を含む全国の俳人の句を収録している。会津からは文政期に親交した如髪、月歩、阜雄(いずれも本稿紹介の書簡にみえる)が入集する。

竹斎がはや足音の紙衣哉
太刀持ば女なりけりほととぎす
夜ざくらやひとりくに散かゝる
淋山自身の句は以下の二句を掲載している。
巢兆佛の追福をいとなまんと思ふの夜
まどろ寝のうつゝか知らじ鹿の声

淋山

老うちを養ふ跡の清水哉

淋山

そして『星の林』の巻末は親友国村の以下の句で締めくくっている。

最上への返事に
又もある奥の便りを稲の花
国村

『星の林』の跋文は桜井蕉雨が担当している。

語られぬ湯殿の淋山上人、星のはやしと言へる集をなせり。こは巢兆居士の十三回二あたるとなり。そのなき魂を祭る国村来りて、予と居士と旧友なれば其よしをすゑに記よとあるに、かの上人の手から手へ念仏をさづけ給ふにひとしく尊くも忝なくもおもひて、筆を浅茅が原の露にそめて八巢蕉雨書
丙戌(文政九年)とし秋

「語られぬ湯殿」は、『奥の細道』の芭蕉句、「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」を踏まえているのは言うまでもない。『星の林』に掲載された巢兆作品は、巻頭の独吟半歌仙のみであるが、これは国村が編集した『曾波可理』との重複を避けたためであろう。

2 高橋国村書簡田中月歩宛 文政一、二年一月一日(推定)

月歩雅伯
新年慶賀日出度奉寿当年も御風交待上候。先は御祝詞如斯候。尚期永陽。謹言。
正月五日

(梅の木の木版画)
印

①古里に親あり子あり鉢の梅
眼鏡賣呼込門の霞哉

淋山

茶にむせる阿房余所眼に梅も咲

酒部屋に人とく移す春の空
など恥入斗御評

国村

①古里に―この句は『傀儡師』（文政三年 芳齋編 冥々八十歳賀集）に入集する「ふる郷に親あり子あり鉢のうめ 出羽 淋山」と同じ。

②国村―武州蒲生の人。高橋源蔵。巢兆の高弟で淋山の親友。

本書簡の差出人は淋山ではなく国村であり、筆跡も淋山と異なる。国村が出羽に滞在していた際に淋山と自身の句を並記して、月歩に送った年賀の挨拶状である。注①に示した通り、淋山の「古里に親あり子あり鉢の梅」の句が、文政三年刊行の『傀儡師』に掲載されるので、本書簡は文政二年の執筆である可能性が高い。書簡1、2による考察をまとめると、文化十四年に巢兆追善集『曾波可理』を刊行した国村は、翌文政元年頃、「巢兆自筆日稿」を携えて出羽本道寺の淋山のところに滞在した。当初の予定では滞在期間は六、七年で、国村は文政七年頃に武蔵蒲生に戻ったか。その際、「巢兆自筆日稿」を預かった淋山は、「巢兆十三回忌追善集『星の林』」に巢兆遺稿の独吟半歌仙を掲載し、「巢兆自筆日稿」を武蔵に戻った国村に返却している。

江戸の三大家に数えられる建部巢兆が今日でも名高いのは、国村と淋山による追善集刊行という顕彰活動がその一助となっていたのである。

3 淋山書簡田中月歩宛 文政四年以前

再白。①天眠上人江別昏同様頼上候。以上。

梅柳の御祝ひ芽出たく申納候。愈御清栄御越歳奉南山候。小子無為御安慮可被下候。然ば去年中は玉章殊御摺物御恵ミ其後不得便義御疎遠失敬御用捨可被下候。御風流も久々不承御懷敷奉存候。②こたび清林二代始而檀廻二参り候。萬御添書願上候。尚又③四五日

頃御見合乍御参詣御光会待入候。④心緒貴面可領雅談候。頓首。

二月廿五日 淋山

月歩様

歳旦

初鳥やをら言葉もあらたまる

永き日を雀来てくるゝ菴哉

鶯の啼残したる三日の月

など恥入候。御正芥可被下候。以上。

- ①天眠―会津高田（現会津美里町）の俳僧。長光寺の住職、清阿本京和尚。『河上集』（文化十四年序 如髮編）に、「袖とひて襦袢さゝげん仏生会 釈 天眠」が入集する。文政四年七月八日没、三十三歳。辞世に「名も朽よ骨もくされよ南無阿弥陀」。『袖塚集』（天保十年 土由編）に「鶯も木蘭色や涅槃像」が入集。
- ②清林二代―清林二代目が初めて檀家廻りをした。清林坊は本道寺からの使僧だったようで、会津高田の月歩に書簡等を届ける役割を担っていた。
- ③四五日頃…―月歩が出羽本道寺に訪ねる予定があったようである。
- ④心緒―心に思っていること。

会津高田の僧天眠は文政四年七月八日に三十三歳で没したので、本書簡は文政四年以前のものである。清林坊という人物は、本道寺住職時代の使僧だったようで、檀家廻りの傍ら書簡等の郵送物を配送していた。清林坊の名は月歩宛淋山書簡にしばしばみえ、書簡4（文政四年）「清林坊檀廻之節具二可申入候」、書簡5（文政九年）「清林坊就檀廻処呈一書候」、書簡7（文政十年）「清林坊帰山節は種々見事御摺物澤山御恵贈」、書簡9（文政十一年）「委細清林坊江御問尋可被下候」、書簡10（文政十二年）「旧冬清林坊帰山之節御懇書并御書物被下、毎度御厚情忝奉存候」、書簡11（文政十二年）「清林坊檀廻之節

まで二送被下候様奉頼上候。已来清林坊御頼被下候。」とあるように、会津の月歩と出羽の淋山の書簡による交流の橋渡し役となっていた。会津からの使僧としては、徳寿院（書簡11）が確認される。俳僧淋山はこのような檀家廻りの役割を担った使僧を介して遠隔地との交流を図っていたのである。

4 淋山書簡田中月歩宛 文政四年七月二十二日

（包紙）

会津高田 湯殿山

田中昌之進様 本道寺

御雅用

再白。①国村方よろしくと申事御座候。以上。

②如來命早魁其御地同様暑中は野嶺杯拾重着いたし居躰残暑難堪不頂候へども、愈御清榮二御風流之旨珍重不浅奉存候。野儀無為御安慮可被下候。然ば毎度御懇切宝札殊摺もの沢山御恵ミ、此方方は一向御無沙汰いたし失敬之至御座候。扱又③天眠上人御遷化之由、御痛間敷奉存候。無常の世ノ中拝謁もいたし度存居候所、残情之至二存候。就夫御追善句集御心掛之由、御尤二存候。此節野嶺道者中二而無寸隙日夜心世話敷不風流、春已来發句等一句も不樂付、唯うかく世に触光陰を消罷在候仕合、此節上人悼句掛御目候ハゞ、本懐候へ共、中々不思付候間略之候。扱又玉詠毎も感吟いたし候。中にも「迎火」の秀句様奉存候。右貴答御礼旁々如斯④清林坊檀廻之節具二可申入候。頓首再拜。

七月廿二日 鹿苑舎

月歩宗匠

雪国の自慢も今や福寿艸

五月雨や庭にひろがる蛙の子

芽花の穂ちりてハ蝶にまじわりぬ

時鳥啼や毎日朝ぐもり

右御正斧可被下候。

①国村方：「武蔵蒲生の国村が、文政四年の時点で出羽の淋山のもとにいたことが伺える。

②如來命「「らいめいのごとく」と読み、「あなたからのお手紙にありましたように」の意。

③天眠上人—会津高田（現会津美里町）の俳僧。長光寺の住職、清阿本京和尚。『河上集』（文化十四年序 如髮編）に、「袖とひて襦袢さゞげん仏生会 釈 天眠」が入集する。文政四年七月八日没、三十三歳。辞世に「名も朽よ骨もくされよ南無阿弥陀」。『袖塚集』（天保十年 土由編）に「鶯も木蘭色や涅槃像」が入集。

④清林坊—本道寺の使僧。

会津高田の天眠上人の没年から書簡執筆年代が特定できる。天眠とは陸奥の俳僧同士として交流があったのであろう。

5 鹿苑舎書簡田中月歩宛 文政九年十月十四日

清林坊就檀廻処呈一書候。追日寒冷之處愈御安康御風流奉賀候。愚衲無魔事消二光罷在候条、御安慮可被下候。然ば当年は亡師①巢兆居士十三廻忌二相成候間追善集出版心掛江戸表②国村子江頼遣候所、来月出来相下シ可申由此節掛御目度候所、間二合不申心外致候。来陽便義二進上可申候。③有圭子より摺もの相届候間、入貴覽候。御序も御座候ハゞ④如髮翁一紙送下され候様願上度候。扱いつも世用繁く甚夕不風流暮し居候。御近作御洩所希候。折節取込故乱書御用捨可被下候。最早年内は得貴意兼可申間、随分御大切二寒御厭御迎陽可被成候。来陽目出度可得貴意候。

早々頓首。

十月十四日 鹿苑舎

月歩宗匠

旅人の拝む日の出や天津厂

下駄尾のそらとけしたる蝨かな
伽羅の香の人ともならぶ十夜哉

身温睡眠増清感して

寝むへのミ外に知恵なき炬燵かな

右至而龜案入貴覽候も恥入候へ共、外句なく無據相認申候。御笑評可被下候。以上。

①巢兆居士十三廻忌―記念として淋山は『星の林』を刊行した。

②国村―武蔵蒲生の人。巢兆の高弟。

③有圭―武蔵の巢兆門人。『浮織集』(文化十二年 淋山編)、『星の林』(文政九年 淋山編)の両書に入集する。

④如髪―会津喜多方の人。淋山は如髪への書簡等を月歩に託すことが多かった。

『星の林』の出版予定が遅れ、文政九年十一月に出来予定となったことを月歩に伝えている。次の書簡6によれば、翌文政十年一月に月歩のところに『星の林』が届けられたことがわかる。

6 淋山書簡田中月歩宛 文政十年一月二十八日

梅柳佳慶芽出たく申納候。益御安泰御迎陽奉賀候。愚納無魔事馬齡を加し候条御休慮可被下候。右年甫御祝詞如斯御座候。余は期永春。恐々百拝。

正月廿八日 淋山

月歩宗匠

香久山を指さすかたや梅の花

逢がたき人ともものいふ柳哉

陸尺の袖ふればちる桜かな

右貴評可被下候。

再白。舊冬は雅札殊摺もの御恵贈毎度御懇情忝奉存候。将亦怪我被成御悩之由被仰遣驚入候。乍去多分之事二も無之候旨、唯今頃

は御全快察罷在候。痛處後々再発不仕様御療治肝要二奉存候。扱又去冬^①巢兆亡師十三回忌二付追善集出版仕候間入貴覽候。何共憚入候へ共、如髪老翁江御序之節、此壺封御届被下候様頼上候。且いまだ余寒難去候へば折角御大切御厭被成候。早々以上。

①巢兆亡師十三回忌―巢兆の十三回忌追善集として刊行した『星の林』(文政九年 淋山編)のこと。

②如髪―喜多方の人。月歩とともに化政期会津俳壇の双壁であった。

本書簡は『星の林』配本の際の添状である。喜多方の如髪にも届けるよう月歩に依頼している。

7 淋山書簡田中月歩宛 文政十年四月八日

(包紙)

会津高田駅 湯どのゝ

田中昌之進様 淋山

雅用貴答

再白。任有合龜墨并朱墨入貴覽候。以上。

朶雲忝拜見、愈御勇猛之旨奉欽喜候。^①野納無魔事消二光候。御休慮可被下候。然ば清林坊婦山節は種々見事御摺物澤山御恵贈殊珍敷天王寺額面の写被下置由來等御聞セ下され、実二珍書小野の筆跡黄会二替へがたき事御懇念忝存候。扱又玉詠いつも耳を驚し称讚罷在候。未年中は御近隣まで焼失嘸々驚き被成候半、乍去御通し被成目出度奉存候。且又^②巢兆居士追善集入貴覽候所、為御謝礼南鐮沓片被下、余り御丁寧之義右様御心配被下候而は却而氣之毒いたし候。何方方も左様義は不申受候。依之御返上可申上与存候へ共、御懇情を無に仕様二而是又失敬二候へばいたゞき申候。何共御心配を掛赤面いたし候。近々^③土由師御入来御待之由、御風流浦山敷存候。野柄事も兎角寺務繁多、別而是方八月迄

八書状等相認候隙も無之趣、殊二当八月伝法灌頂修行仕候間、右諸支度方二而如外甚取込乍恐不風流此節紀州^④秋夢子滞留いたされ罷在候へ共、面会仕候のミ風談も承る暇無之仕合御座候。將又野院客殿蘭間扇面二いたし六十余州之高名御方玉詠を書記度存念相心掛候所、此度細工人有之半出来いたし候。貴菴之玉句相記申候。右貴答御礼等如斯御座候。余情期重便。頓首再拜。

四月八日 淋山

月歩様

竹馬の腰の居りやけしの華
いつの世に啼そめしぞや時鳥

○

鶯にしばし眠りをうつしけり
酒嗅き人二も交る子の日かな
紅梅や授戒七日の人出入

世は萬事夢の如し

昨日見し花をふミ行浮世かな
など申捨候。貴評可被成下候。以上。

①野衲―田舎僧。僧の自称。

②巢兆居士追善集―『星の林』(文政九年 淋山編)。

③土由―陸前登米郡米川村狼河原字根方足上屋(現宮城県東和町)の農家沼倉新三郎の次男に生まれ、八幡山大誓寺の道士、大屋何某の法弟となり、大屋氏を称す。字は久敬、通称卓蔵。

初号は志由で文化十二年頃土由と改号する。仙台の高橋東阜に師事し、文化元年、志由十七歳の時に東阜から門弟の指導を託された。文化十二年『浦づたひ』編、文政元年『美佐古鮓』編。文政六年頃、会津に往来し、文政十一年頃会津に移る。嘉永三年(一八五〇)十二月五日、二本松領安達郡大平村の武藤伴蔵宅で没する。六十三歳。

④秋夢―紀州の人。

『星の林』(文政九年 淋山編)が会津の月歩に無事届き、その謝礼として月歩から南鐮一片が贈られた。このことに淋山は恐縮している。本書簡で注目されるのは、土由の会津入来予定が月歩から淋山に知らされている点である。「大屋土由年譜稿」の文政十一年の項には、「この頃、会津へ移るか」とある^⑤。

8 鹿苑舎書簡田中月歩宛 文政十一年七月十二日

如貴命暑中前より大暑罷在候處、無御障御安康旨奉恭慰候。愚老無異寺務罷在候条御安慮可被下候。然ば見事之御菓子殊箱迄被下置御懇念忝奉存候。且毎度摺もの御惠贈玉詠感吟仕候。愚老事は兎角寺務繁く春方行脚衆も度々御尋候へ共、御合手ども難相成自然不興笑止千万隱遁不仕内は不思議雅も出来兼別而此節杯は寸隙無之御座候。ほとんど世事倦退屈いたし^①来五年秋隱居仕心掛致、其のミ樂ミ罷在候。②如髮翁へも当年は御出会無之由正月中^③卓呂子御参詣にて御様子等承り申候。当秋杯も御参詣御心掛之由念申候。扱任有合籠品式種籠摺掛御目候。發句も一向無之恥入候。右御礼可申入度如斯御座候。余は期重音候。頓首。

七月十二日 鹿苑舎

月歩先生

虫干やゆるく 拝む^{子ハシ}涅槃像

ある僧の美婦人の画に讃を乞はれて彼を誡めて
いつまでもうつくしくハなしけしの花

扇持手の草臥や京の町

右貴評可被下候。外一句もなし。以上。

①来五年秋隱居仕心掛―翌年(文政十二年は五年)の隱居予定を月歩に打ち明けている。

②如髮―陸奥国喜多方小田付村の人。本名関本直房。通称與次兵衛。別号に市中中軒、睡翁、六種園。関本家は越前屋を屋号とする商家であった。文政十二年(一八二九)九月十五日没、八十一歳。

9

③卓呂―関本庄左工門直也。如髪の次男で直有の弟。

鹿苑舎書簡田中月歩宛 文政十一年十一月一日

尔来は久々不得貴意候へ共、愈御安康御風交珍重奉存候。愚老無魔事罷在候条、御安慮可被下候。然ば^①当秋は最上は大変之洪水百年二も無之由、世上騒ケ敷事二御座候。其御地は如何御障も無之候哉。御察申居候。扱又当年行脚衆も不相見風談も不承候。春中加賀生れの^②雪丸と申御方相見えられ其後南都^③萬路と申行脚被参候のミ二御座候。夫後一向不風流にて発句も無之候。定而玉詠沢山可有御座と奉存候。些々御聞セ可被下候。委細清林坊江御問尋可被下候。余は期後音之時。頓首。

神無月朔日

鹿苑舎

月歩老君

蠅などハ見えぬ寺なり土用干

白粉の花やなる鐘七ツ寺

初時雨茄子ちいさし瑠離^④の玉

椎樫の果報目出たき枯野哉

など申出候。貴評可被下候。以上。

①当秋は最上は大変之洪水―酒田市資料館第211回企画展資料「最上川 氾濫と治水」によれば、文政十一年、「7月9日に大雨が降り、10日に洪水。赤川の堤防360メートルが決壊し、多くの橋が流失。酒田の松原堤防も破れ、大手橋、新井田橋が大破。鵜渡川原と船場町浸水、今町まで水が上がる。352戸が浸水、御蔵米2万俵が濡れる。最上地方より水死人や家屋多く流れ来る。」とある。

②雪丸―加賀生まれの俳人。

③萬路―奈良の俳人。

10 淋山書簡田中月歩宛 文政十二年一月二十六日

再白任有合朱墨入貴覧候。以上。

梅柳之佳慶四海同風目出度申納候。愈御安康御超歳被成大慶不浅奉存候。随愚身無魔事加馬齡候条、御安慮可被下候。右年甫之御祝詞如斯御座候。尚期永春之時、恐々頓首。

正月廿六日

鹿苑舎

月歩宗匠

再白

旧冬は御懇書并珍器御惠贈、毎度御厚情忝奉存候。此方方未書状をも陸々不進申御疎遠不實至、御仁免可被下候。将又去年中も御家内御不快之御方有之、御心痛被成御坐氣之毒二奉存候。去年は兎角時候不順致欺何国も病人有之候。旧臘より近年二不覚口寒殊大雪、右之趣二而八当年定而順季二可有御座杯と一同申居候。扱又^①土由先醒御出御越歳にて御社中之中御稽古之由、嚙々御一興之義も有之御事二奉察候。且野子杯は近年甚無風流時々行脚衆御尋被下候へども、兎角寺務繁く、尚又老衰いたし、何事も面倒にて風雅氣さし引込候間、唯御宿申のミ雅談も不承漸く閑暇節発句出来ほうだいに申斗二御座候。当春之句入貴覧候。

かすむともしらず越るや嶺の鹿

手習のむかし思ふや八巾

嘶して思はず三里夕きゞす

など御正斧可被成下候。以上。

①土由―大屋氏。仙台で門弟を指導し、文政後期に会津、晩年には二本松を中心に活動した近世後期の東北を代表する俳人。

書簡7より、土由の会津入来が文政十一年で、越年報告を受けた本書簡は文政十二年一月のものであると推定される。

11 鹿苑舎書簡田中月歩宛 文政十二年四月七日

德寿院法印御參詣二付御伝声候。殊御客躰逐一承り如貴顔弥向暑之節御勇積御風流は欣磨不浅奉存候。随愚身無異御休慮可被下候。然ば旧冬清林坊帰山之節御懇書并御書物被下、毎度御厚情忝奉存候。此間ろはいつも御疎遠且又玉詠一入洗耳、扱拙子義は年増寺務繁多、別而老衰いたし萬多忘いたし發句さへ趣向も不出來甚ダ無風流二暮罷在候。①当秋も隱遁之積二取究メ申候。左候ハゞ世事も薄く旁心易も有之べく候哉、杯と楽ミ居申候。折節旨も御達者賑合、如仰混雜巨細は御法印江御問尋可被下候。籠摺入貴覽候。山形摺役甚見苦敷恥入申候。余情後音。頓首百拝。

四月七日 鹿苑舎

月歩大君

穀布鳴（こむね）や此山守護不入

朝ぼらけ松はよきもの夏の初

手習のむかしおもふや几巾

陸尺の袖ふればちる桜かな

ふんで行雪の下から春の水

右貴評被成下候。以上。

①当秋も隱遁之積―淋山が隱遁したのは文政十二年秋。

12 淋山書簡田中月歩宛 文政十二年七月二十三日

如來論秋暑節御難儀候處安康候而大幸不浅奉存候。愚身無魔事二光を消し罷在候条、御安慮可被下候。然ば珍敷唐茶御恵ミ毎度御懸情忝奉存候。且久々①土由宗匠御滞留旨嘸々御拝受御楽ミ奉察候。草菴江も先日中仙府②日人老翁御來鴻ニて廿日余御滞留被成候へ共道者中ニて宜敷俗談のミ残情至ニ奉存候。殊近年氣力衰ひ候哉。何事も退屈いたし骨を折事不相成候二月日を送る事御座候。扱又愚老も八月下旬致隱居新居円満寺と申寺江閑居仕合ニ御座候。右、寺役も無之暇勝之寺故嘸安心ニ御座候。将又承り候へ

13

淋山書簡田中月歩宛 文政九年〜文政十二年

ば貴菴ニは画之御達人之由、呈上不致御失望も不仕候。愚身も閑居いたし候て、慰ミ少々稽古仕度念も御座候。廻も出來申間敷候へ共、独樂二いたし可申哉杯と心掛罷在候。就文画本も不持候へば至而覺へ易き筆を略したる所を手に御認メ被下候ハゞ難有奉存候。四君子の中菊を習ひ度存候。依之巻物へいたし候様菊三雅程蛙五六疋臺式三疋龜猫狗兎其外花鳥御認メ清林坊檀廻之節まで二送被下候様奉頼上候。已來清林坊御頼被下候。御文通も出來可申候。扱又玉詠感伏いたし候。取込中故乱書御推覽可被下候。余は期後音之時。恐々頓首。

七月廿三日

淋山

閑子どり啼や此山守護不入

居風呂にふだん汲こむしミづ哉

短夜を寝せぬ工面歎啼蛙

小家からひろがる秋の匂ひかな

禪門の鎌提て行花野かな

など恥入斗、貴評可被成下候。以上。

①土由―大屋氏。仙台俳壇の指導者であつたが、文政六年頃会津

に來訪、文政十一年以降にも滞在している。文政十一、十二年

には会津にいたことが本書簡によつてわかる。

②日人―日人が淋山のもとに二十日間ほど滞在したことがわかる。

※八月下旬に円満寺に移り、隱居予定であることを述べている。

淋山書簡田中月歩宛 文政九年〜文政十二年
新春之吉賀萬国同輝目出たく申納候。愈御安康御迎陽大幸不浅奉存候。野坊無魔事馬齡を加し候旨、御安慮可被下候。然ば①清林坊檀廻ニ參り候故幸之呈愚札候。扱は旧冬より近年無之薄雪自然寒くも心易罷在候。乍去毎も世用二のミまぎれ、一向不風流文通の発句も無之唯うかく相暮候。且昨日②国村より摺もの相届候旨入貴覽候。何共申兼候へ共③如髮君へ御序之節一封御達可被下

候。余は期永日之時頓首。

正月廿四日

淋山

月歩様

鞠場より目につく門の柳哉

茶畑も春めく空や智恩院

右御笑評可被下候。以上。

①清林坊―本道寺住職時代の淋山が月歩に手紙を出す際に世話になつた檀家廻りの僧。

②国村―高橋氏。武蔵蒲生の巢兆門人。

③如髪―陸奥国喜多方小田付村の人。本名関本直房。通称與次兵衛。別号に市中中軒、睡翁、六種園。関本家は越前屋を屋号とする商家であつた。文政十二年（一八二九）九月十五日没、八十一歳。

※如髪は文政十二年の没であるからそれ以前の書簡、蒲生の国村が発行した摺物が月歩を介して淋山に届けられているので、文政九年以降の執筆であろう。筆に力があるので11、12の書簡より執筆年代は早いように思われる。

14 淋山書簡田中月歩宛

白梅の薫風普天同輝日出度申納候。弥御安康御超歳欣慰不浅奉存候。不佞無為致加齡候条、御安慮可被下候。然ば舊臘は錦書被下添致拜誦候。玉詠何レも面白く感吟いたし候。殊又摺もの御恵ミ毎度痛入申候。且^①阜雄・好山御両君江別昏同様頼上候。余は期永陽之時。頓首。

正月十七日

淋山

月歩大君

戸をあけて眼鏡はづせば霞哉

三四尺雪ほりつめて五形哉

江戸百といふにも馴れて春の雪

朝な夕な親より子より鉢の梅

盛砂の門をくゞれば柳かな

など恥入斗御笑評可被下候。御鴻便に御佳作御洩し可被下候。以上。

①阜雄―会津塩川町の人。幼名浜吉。通称斎藤直右衛門、のち猶右衛門と改めた。呉服太物商を営む。屋号は吉田屋。除風庵、物見居と号した。本宮の塩田冥々と交流し、その感化を受けたと思われる。精器、梅二、半岱との交友深く、江戸の春湖、須賀川の清民、越後の乙良らとよく文通していた。門人には豊島松圃や諏訪竹圃、遠藤香村や妻マサもその教えを受けたという。著作に『荻日集』。元治元年（一八六四）秋没、八十六歳。追善集『圓満集』（大正十四年曾孫月雄刊）。『星の林』（淋山編）に「夜ざくらやひとりく」に散かゝる「阜雄」が入集する。

本書簡の執筆年代は未詳だが、文字には勢いがあり、晩年のものはなさそうである。

結 語

今回紹介した淋山書簡十三通、国村書簡一通と淋山関係俳諧資料の調査によって判明した事項をまとめると以下の通りである。

出羽の俳僧淋山は、遅くとも文化四年には武蔵蒲生に訪れており、文化十二年まで滞在した。その間九年以上は千住の建部巢兆に師事しており、巢兆の編著、月並に熱心に投句し続けていた。淋山が出羽に帰郷するにあたって刊行した『浮織集』（文化十二年）は、師の巢兆が晩年に企画していた趣向を活かして巢兆の序文を掲げて編集したものであった。文化十四年に出羽国本道寺の住職となった淋山は寺務繁

多な状況の中、本道寺の使僧清林坊らを介して会津高田の田中月歩、喜多方の関本如髪らと親交した。陸奥に根を下ろした俳僧淋山は、文政期には武蔵蒲生在任時代から親しい巢兆の高弟高橋国村を出羽に迎えた。国村は巢兆追善集『曾波可理』（文化十四年）刊行後、「巢兆自筆日稿」（未見）を持参して出羽本道寺の淋山を訪れ、文政元年から数年間（当初六、七年滞在予定）出羽に滞在した。文政九年、巢兆十三回忌追善集『星の林』を刊行した淋山は、国村から借りた「巢兆自筆日稿」から抄出した巢兆の独吟半歌仙を同書の巻頭に掲げ、国村らと追悼次韻を巻いた。江戸の三大家として建部巢兆が今日も名高いのは、淋山が出羽に移ってもなお追善集を刊行するなど顕彰活動を実施していたことが、その一助になっていたのである。また、会津の月歩は文政十一年に俊才大屋土由を迎えた喜びを淋山に伝えるなど、淋山書簡によって、文政期陸奥俳壇の様子が一部明らかになった。

今後、田中文庫所蔵書簡群の解説を継続することによって、近世後期における東日本俳壇の実態を更に解明することができるだろう。

〔注釈〕

- (1) 『東北・北海道俳諧史の研究』井上隆明著 二〇〇三年 新典社 一八二～一八四頁
- (2) 拙稿「化政期会津俳人の西国旅行―『関本如髪集成染筆帖』を中心に」『連歌俳諧研究』一四二号 二〇二二年
- (3) 『俳人藤森素壁全集』矢羽勝幸・二村博編著 一九九八年 信濃毎日新聞社 四五頁
- (4) 『福島縣俳人事典』矢部梢郎編 一九五五年 福島縣俳人事典刊行会 一一〇頁
- (5) 「大屋土由年譜稿」氣多恵子 二〇〇二年 『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第二十六号

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり、会津美里町の天野セイ子・天野美和子両氏には、田中文庫の俳人書簡資料調査、翻刻の掲載につきましても快諾いただき、格別のご支援を賜りました。ここに記して深謝申し上げます。

本稿は、科研費（基盤研究(c)課題番号23K00299）の研究助成による成果の一部である。